

【各グループからの報告】

アートボランティア・プランナー

藤原旅人氏

一時間に亘って議論をしていただきました。これから発表をしていただきます。
最終的には、これからの10年を見通してどんな活動をするのかと、3つのキーワードを落とし込んでもらいますが、どのような議論がされたかもお話しいただきたいと思います。
形式は自由です。どこのチームからいきますか？

「私達Eは12月なので“椿の会”です。

1つ目の今の課題に関しては、なかなか人が集まらない、繋がりが広がらない。活動内容が変化している一方でマンネリ化している部分もあるのではないかと、人間関係もマンネリ化するでしょうから、この活動を継続する為にはどうすればいいのか。
まずは、先々の世代交代が課題です。

2つ目の今日の午前・午後のお話を聞いて印象に残ったのは、お互いの交流がもっとあってもいいよね、という意見がありました。これは「点と線・面へと繋がっていく」という山口さんのお話で、大学では若者自体が入れ替わるのでボランティアの継続が可能であり、ボランティア同士は学び合うことも大事だというお話が出ました。

また、「勝手に関わってくれる」という視点も大事である。わざわざ応募しなくても勝手に関わってもらうにはどうしたらいいのか、と鄭さんや坂崎さんの話にでてきました。

坂崎さんの朝弁の話では、おにぎりを握ってくれるおばちゃんたちが、最初“タダでやって”と言ったら“ふざけるな”とおばちゃんに言われたという、“ふざけるな”言うことも大事だなあと 생각합니다。私たちも何か行政からタダでやってよと言われたときに“ふざけるな”と言えるといいですね。

10年後に向けた活動ですが、初心を一度再確認し、自分達の活動の基本や基礎はいったい何かを、再度学び直すことが大事ではないかと思っています。団体が培ってきた活動の豊かさをもっと伝えていくべきで、一度整理して辞めるなら辞める、譲るなら譲る、続けるなら続けられる方法を考える、それは痛みを伴うかもしれないが、いつかやらないといけない大事なことはないか、という話になりました。

今日の3つのキーワードは、共感の大切さと、あとSNSとデータ、ユーザーという言葉が出ました。社会の変化に対応できる柔軟性や笑顔で元気にというキーワード、それと個人と向き合うということ、興味を持っていそうな人を活動の仲間にお誘いする出会いを作るというキーワード、安心して活動できる循環をめざす。以上です。」

藤原氏 「ありがとうございます。さっそく3つを超えてきましたね（笑）」

「グループBです、名前は“凄助美心（せいじょびしん）”、漢字で凄・助ける・美しい・心と書きます。この意味は後ほど。

まず、活動における課題です。各々の現場で困っているテーマをあげていくと、人手不足や時間がない、意欲があまりあがらない、健康や年齢の問題と多く出ました。

ボランティアであるにも関わらず、ここまでやらないといけないのか、ここはやりたくないのにやらされ、やらないといけない状況下にある、ちょっと強い言葉になりますが、責任という共通の問題意識みたいなものがでてきました。

この責任は逆にある程度の権限を与えてもらえれば少し気持ちが薄まるのではないか、例えば、パトロールの腕章があれば公園における犬猫の糞の問題とか言えるけど、ないと向こうから何か言われてストレスになり、そういうものが付加されておればストレスはない。

結局、やっていくうちにどんどん状況が変化し負荷され、責任みたいなものがでてくると思います。それはボランティアを募集する側がもう少し丁寧にある程度の変化を予測し、ボランティアにはここをちゃんと担ってもらおうとか、多く集まった人たちに一括で同じことをお願いするのではなく、個々の出来ることや得意なこと、出来ないことも合わせて、きちんとコミュニケーションをとり、役割分担していくことが出来れば、という話になりました。

今後の10年を見通して、そういう現場になっていけばいいなとなりました。

キーワードは、丁寧な説明が1つだけです。

余談ですが、ボランティアという言葉の認識・響はどうかの話になりました。これは世代で全く違い、70代は、お金があり時間がある人がボランティアやっているという、「あそうね、お宅はお金があるし余裕があるからボランティア出来るのね」みたいなちょっと誇らしげなイメージです。50代は奉仕活動という言葉が存在して堅苦しく強制感があり、ボランティアという言葉に好感を持つ傾向にあります。30代は普通に「ああボランティアね」というぐらいだと思いました。そこで「ボランティア」の日本語訳（漢字）があってもいいのじゃないか、と皆でボランティアのイメージを一字ずつ出し合ったのが「凄助美心」です。凄いと助けると美しいと真心、真・心はどちらもしんと読めるので心に、今後これになればいいぐらいの気持ちでおります。以上です。」

「Fチームの発表をさせていただきます。名前は“ゆっくり身の丈”です。

まず1つ目の日頃の活動における課題は、いろんなことをやっていくなかで専門知識をもつ必要があることからスキルアップにしました。特に太宰府で万葉集・短歌をされている方は、そこに入り込んでいくのが難しく、理解していただけないのが悩みで、参加している人たちをうまくグループ化していくことも難しい。また、入ってくる人たちも含めて参加者を掘り起こすことやそこにいる人たちの意見を集約し、それを後に続く人達が受け継いでいくという難しい問題があります。この課題の解決は“自分自身が楽しんでやろう”ということです。

次に2つ目の午前、午後の事例報告をきいて印象に残ったことは、古賀さんの体験談がすごく、いろいろ豊富なことをされているのに驚きました。地域の人ともっと溶け込んでいけるようになったらいいねと、それから日本とアメリカのグラフに差があることや持続と循環も非常に印象に残ったことです。

次世代の人たちへどうやってそれを育てるかに対する考えかたが印象に残りました。それと情報発信を分かり易くする方法。まさに私たちは実際にやっていますが、ビジュアル化していくことが大事だということでした。ボランティアで本人と周りのひとのギャップがあるというお話もでした。

3つ目は、先程の万葉集のお話の中にありましたが、子どもたちがそこに入ってくるのはなかなか難しいということ、それから、私の自治会に九州産業大学がありますが、若者たちと一緒に自治会の活動をやっていただけたらもっといいのではないかと考えます。参加者を呼ぶ、仲間をどんどん作っていきたいと思います。

それと午前中のお話のなかでも、情報が入らないからボランティアに参加できないという意見が結構でした。

情報が入らないのではなく、今は情報の受け手がより高度な情報を貰う方に進行していて、より高いものを求めているので、そのことを“情報がない”というふうに言われている。いろいろな情報のツールをもっと研究していく必要があるという意見もでした。

3つのキーワードは、沢山ありましたが、先程と同じく、“楽しまなきゃいかん”と、自分が楽しまないとボランティアなんて出来ない、無理をしない、身の丈に合った出来ることをやるということで、“ゆっくり身の丈”という名称になりました。

また、ボランティアはタダじゃないよと。これはバーターの必要があるということ。お金ではなく、自分がそこで活動することで、やりがいをもらえればいいという場合もあります。これが周りから押し付けられのではなく、自分がやってよかったなと思えることで、自己満足というのがキーワードです。これから国際化や高齢化のなかで、高齢者が一人で暮らしている地域が増えます、それに対する取り組みをする必要があります。

ビジョンを共有してメンバーで繋がっていきましょうでした。」

「Gグループの発表です。グループ名は中国読みの“無免（ウミエン）”です。

メンバーに中国から来ている陳さんがいらっしゃったので、これにしました。

課題は世代交代です。団体の活動を引き継いでいく人や新しいメンバーが入ってこないことが一番大きな問題だったと思います。講演や事例発表の中でヒントになったことを踏まえて、一気にキーワードに結びつけました。

まずコミュニケーションが大事ですね。コミュニケーションはメンバーの中であったり、その団体の活動を支えてくれる周囲や地域のかたや、いろんな関係先の人など新しくメンバーになってくれそうな人に活動を十分理解してもらい、世代交代に繋げていけるということです。まず自分たちが何をすれば楽しいかを確認して、活動がずっと続くと、今、していることが当たり前になってしまう。まず自分たちが楽しんでいる姿を見てもらうことで、新しい人も入りやすいのではないかとということです。また自分たちがやっていることを見直し、何をすれば楽しいかということを確認することが大事です。そして世代に合わせた情報発信をする、例えば若い人へは、どういうキャッチコピーなら注目し、興味を持てるかということが必要ではないかと思っています。このフォーラムについても、多くの若い人に来てもらうには、具体的なキャッチコピーを考えてもらうと良かったのではないかと意見もありました。それからコミュニケーションを深める手段として、先程もありましたが、飲み会や食事会も重要だということでした。PRをする際にいろんな情報発信のツールがあり、それを世代に合わせた上で発信する内容なりキャッチフレーズが必要となります。その世代のターゲットとする世代の方に考えてもらうと、よりアピール出来るのではないかとすることがありました。以上です。」

「Dグループです。この会の名前は“とびうめの会のキャッチコピーを考える会”です。私は添田町でガイドをやっていますが、もともと山の会の会長として、山登りの専門です。話をしているうちに、「とびうめの会」ってなんなの、ということから、いろいろ話を聞きながら、PRとかで、ボランティアの形で音楽とか文化に興味がある人を巻き込んでいく。ボランティアの参加者が少ないとか若い人が入ってこないとか、文化ボランティアの認知度が低いというのは、文化は目に見えにくいからだと思います。

うちの会が何をやっているかという、英彦山と福知山の山頂にトイレがあり、そのトイレの掃除をしています。あと年に二回山開きをして、その時に餅つきをして「ぜんざい」を配ります、秋は豚汁を配っています。

うちの会は会費がありません。お金をどうするかというと、手伝いのボランティアの人からお金をいただいています。もち米を運んでくれる人、材料を運んでくれる人、手伝いに来るからには意思がある、じゃあ1,000円いただこうと、それで3年間運営費を稼いでいました。そういう活動をさせていただきながら後継者はもうできています。

先ほど言いましたうちの会のトイレ掃除は900mと1200mの山の上です。みなさんが「ありがとう」とか、「ご苦労さまです」と感謝の言葉を言ってくれます。

その人達にトイレ掃除は目に見えるので手伝いましょうと、後継者が出てくれています。それでは見えない文化を視覚化するためには、キャッチフレーズや、キャッチコピーが必要じゃないかということです、これはあくまでも提案ですが“愛と音楽で心を繋ぐとびうめの会”でどうでしょうかということで纏めさせていただきました。」

藤原氏 「田中代表、いかがでしょう（笑）。ありがとうございました。」

「Aグループです。メンバーはとびうめの会の二人に加えて、高校教師のりーさん、中国の方ですが、朝鮮民族の中国人ということです。それから大村から参加の方、文化施設のかたです。それぞれ悩みを持ちつつの参加です。

午前中のお話と午後の事例報告ともすごく良かったです。やはり若い世代との繋がり、人材確保、有償無償の話が随所に出てきました。

これからの10年については、世代間の繋がりに加えて異業種、異国籍との交流です。福岡県内にはたくさんの外国人がいます。りーさんいわく、実は今日のフォーラムでボランティアをしたくなかったけど、「情報や接点がない」そうです。外国人との交流と協力関係というのも大事だという意見でした。その他に、ボランティアという言葉や文化活動は、そもそもなんのためにあるのか、どういう定義でやっていくのかを考えるべきだ。もっとボランティア活動をフレキシブルに捉えたらどうか。それから小さいことからやってもいいんじゃないか、という多くの言葉が出ました。

それを踏まえての3つのキーワードは、一つ目がボランティアとは、を改めて問い直し続ける。二つ目が異年代との繋がり、三つ目がコミュニケーションでSNS等の話も多々出ましたが、やはりこういう対話ですね、顔と顔をあわせて肉声で話し、お互いのキャラクターとか温度を感じ取る、そういう機会がこれからはとても大切だという話ができました。

我々とても優等生なグループだったんです（笑）、とてもやりやすかったです。」

「C 班です、宜しくお願いします。グループの名前は、自己紹介のときに皆さんそれぞれの趣味を出されたので、“趣味を楽しもう会”にしました。

1 つ目の活動における課題はグループ内で多く上がった言葉が「継続」でした。一言で継続といっても、団体が長く続くようにしていくこと、それには自分自身が健康であること、そのうえで物事を継続するという二面があるという意見が出ました。

2 つ目の今日の印象ですが、多かったのが大澤先生の報告にもあった生態系との循環です。そして鄭さんのボランティアってちょっと胡散臭い^{うさんくさい}が、私の中で共感できる部分があり、なにかボランティアをしようとする、そのボランティア団体がどういうことをやっているのかわからないのに、何か指示された時によく分らない人の指示はあまり受けたくないなという、顔がわかるということ、お米を研ぐのもボランティアだよという気軽さ、東北で震災があって自分もなにかしたいという気持ちはあっても、わざわざ東北に行って土木工事とかをやるかと言われたら、自分が出来ないことは出来ないと思って、何か出来ることから始める気軽さということが自分の胸に響いた言葉でした。

これからの10年に向けても、継続という言葉になります。10年後も活動できるように繋がりをつくり、分かり易い活動をし、リピーターや仲間を増やしていくことが重要ということでした。

キーワードは言葉が重複しますが、繋がりと継続、それと分かり易い活動、というのが「趣味を楽しもう会」の3つのキーワードとなります。以上です。」

藤原氏 「ありがとうございます。さあ残りは、どうぞどうぞ最後のトリです。」

「H のグループです、宜しくお願いします。正直言いましてほとんど出尽くしています。私どもも同じことを話っております。最初の課題は、後継者がいないということです。先生方のお話でも皆さんからも出ましたので、次に飛ばして三番目の今後の10年後の見通しは、何をすべきかで衝撃的な発言がありました。Mさんから、“10年後は活動しよらんばい”。まあそう言わずに、となだめて10年後について考えました。

自分たちの活動自体を見直し、活動のありかたを考え直すこと。どうしても枠の中に縛りつけようとしているのではないか、ということで最後のキーワードは、楽しく、活動するにも短時間で、より多くの人が気軽に参加できるようにしました。先輩たちが受け継いだものを守らなきゃいけない、こうあるべきだ、かくあるべきだということから一步脱皮することも大事じゃないかということで終わりました。以上です。」

藤原氏 「ありがとうございました。大澤さんと古賀さん、皆さんの発表を聞かれていかがですか。」

【まとめ・講評】

古賀氏 「私が伝えたいと思っていることは、4つあります。皆さんの発表を聞きながら改めて気になったのが、楽しいってことはすごく大事で、私もですが責任、そのグループでエキスパートになったとして、責任の持ち方と楽しさのバランスのところが気になりました。福岡でいうと子供の村という民間（NPO）の児童養護施設があって、たくさんのボランティアが活動されていますが、皆さん楽しみながら責任意識もバリバリ持って、夫々の得意を生かしています。その“コーディネーター役”は今後論点として深掘りできそうだったのが一点です。それから国際協力、NGOの団体で学んだ言葉で、アスクアンドサンクスという言葉があります。これ生態系のお話とも重なるのかなと思いますが、お願い、お願いと、鄭さんのようにありがたいという、バックの部分ですね、多くの団体はお願いのルートばかりやって、バックのやりとり、コミュニケーションを蔑ろ^{ないがしろ}にしていると感じます。国際協力は顔の见えない遠くの国の人たちを支援する機関なので、このサンクスをいかに増やすかが大事と聞いたことがあります。我々、ボランティアの好循環を生んでいくためにサンクス、サンクスと意図的に多くしていくことも一つの手だと思いました。

それから、こちらのグループで言いますが、先ほどの大澤さんの発表で、辞めるか・譲るか・続けるか、その覚悟の時も要る、という話があって、私はそれをイノベーションと解釈しました。リノベーションは改修工事のことですが、改修するだけでなく今どきのトレンドとか、地域の課題とか、ニーズにあわせて付加価値をつけ建物を有効活用するということだと認識しています。我々もそうですが、団体名が古びてきた感があったり、当初の理念の文章が古びて来たりと、一定のイノベーションを定期的にやっていくことも必要かなと思います。それから、留学生さんと一緒にグループでよかったと思います。こういう研修会で外国人のかたが参加する時代になったんだなと今日は改めて思いました。非常に高い志をおもちで、日本も大好きと言うかたがいらっしゃったら、国籍云々問わずにどんどん仲間につけなきゃなと、私はすごく啓発をされたところです。以上4点となっていました。」

藤原氏 「ありがとうございます。じゃあ大澤さん。」

大澤氏 「僕も今日来ていただいた日本語学院の方に、ほんと感謝ですね。これはすごく沢山の気づきを得ましたが、その世代交代とか若い人に代わってほしいと皆さんが共通のイメージや、課題を抱えていても、外国の方に関わってほしいと思ったことなかったですね。でもこうやって外国の人と交流があって、来てもらおうと喋って関心をもってもらえたり、逆にその彼女に関心をもったりするわけです。なんだろうね、若い人、若い人と思ってたのに完全に見えてない相手がやっぱりいるんだな。そこで日本語学院のかたに参加してくださいと、誰かをきっかけにして、多分一人だと来れないと思いますので、友達と一緒に来ていただいて、そこを取っ掛かりにして急にチャンネルが生まれたりすることがあるんだなあと。だから若い人若い人と思った時に、今までこうじゃなきゃ駄目だと思っていたチャンネルをちょっと違うチャンネルを見つけ出すってこと。もうちょっとやってもいいのかなというのがありましたね。

この他に3人の事例発表を聞いてすごく面白かったなあと、ほんとにこの顔ぶれで話を聞いてよかったなあとと思っています。

僕が生態系とか循環といったときに、自分の家の前の畑に、勝手に野菜とか野草が生えてきます。そうやって、勝手に生えてくるのはすごく有り難いです。だから勝手に関わってくれるボランティアっていうのも、呼びかけたりしない、だから耕して種やって肥料やって水やってということをやらなくても勝手に生えてくれるっていうようなことが起き出すと、坂崎さんの話の中で組織を運営・管理することがやりたいわけじゃなく、自分は活動がやりたいんだと。すごく気持ちもよくわかって、どうすればそうやって勝手に生えてきてくれるようになるかなあというのは、自分が畑をやっていると言えるほど丁寧にやっていますが、とにかく、それがもう文化生態観察ってことの一つで、時々畑に出て、なにが生えてるのかなあと、よく見たらパクチー生えてるじゃないって、ここにパクチーの存在が分かるようにしておく、そういうことを自分の活動の中で誰か関心を持ってくれてるっていうことに気がつけば、その人とちょこちょこ会って、時には一緒にご飯たべたり、こっちからも相手に関心をもって、向こうからの関心を受け込むことで、なんか勝手に関わるようになってくれるっていう循環がうまれるといいなあと思いました。僕自身も刺激を受けました。ありがとうございました。」

藤原氏 「ありがとうございます。僕自身もいろいろ刺激を受けました。僕も坂崎さんの話はすごく面白いなあと考えていまして、運営をやりたくはないと放りだすところは勇気が必要で、存続のためには自分がやりたいことをやって、他者へ委ねるみたいなのがすごく重要じゃないかと思いました。皆さんの今回のグループワークの発表を聞いて、一つは、今の活動を整理してみる、もう少し考えてみるという気付きは、まさに今回のボランティアフォーラムで一番やりたかったことですね。「新しいボランティア」という挑発的な言葉を使ってみました。結局現在どういうことなのかを今一度この場所で議論をしてみたいなと思いました。そこで“楽しむ”という言葉、“他者へ伝える”という言葉が多く出てきたなあと感じています。僕自身の個人的な興味は、年代によってボランティアという言葉に対しての印象・理解度が違うところがすごく面白いなあと思いました。その部分はなんか無理にボランティアってこうだねと一つに纏めなくてもよくて、そのボランティアに対しての理解の違いというのが多様な人を巻き込む一つのきっかけになるのではないかというのをすごく感じました。僕の感想は以上です。

皆さん、この後帰られて家族なり、友達なり、彼女なり、悪友と議論してほしいな、と思いますね。また来年どういう形になるかわかりませんが、継続して考えていきたいなと思っています。」

司会 「まとめていただきありがとうございます。お役に立つこと、考えさせられること、ほんとに心に響くもの、いっぱいだったと思います。ほんとに成果がありました。ありがとうございました。」